

# TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.85

難局への挑戦が  
新たな解を創り出す

高山羽根子さん

芥川賞受賞インタビュー



# Challenge to a New Normal

## 難局への挑戦が新たな解を創り出す

2020年度前期は、世界的に大きな試練の年となりました。学内においては、感染症対策を行いながら面接指導と施設利用を再開させることを目標に、『オンライン対応委員会』『留学生対応委員会』『PNN委員会\*』の3つの委員会を立ち上げ、横断的な取り組みで学業の継続を図りました。また、オンラインによる授業対応はもちろん、精神面のフォローや状況に応じた奨学金、就業支援や留学生対応など、学修環境を支えるべく、各部署が主体的に動いた期間でもありました。

この困難の中で、捉え直すことのできた本質もあります。社会がクリエイティブな力を求める強さや、高い出席率に見られる学修への意欲、感染症対策を通じた意識改革や授業形態の多様化は、今後の創作活動にも大きな影響を与えることでしょう。困難を乗り越え、発展につなげるべく挑戦を続ける、多摩美の今と未来をお伝えします。

\* Promotion Committee for New Normal = 新しい日常を推進する委員会

### 感染症対策を全学科で共有し、施設利用と面接指導の再開を実現したPNN委員会

#### 学科を横断した取り組みで一人ひとりの意識を変えていくことが大切

学内に設置された3つの感染症対応委員会の1つ、「PNN委員会」は、安全・安心な施設利用や面接指導の実現に向けて、感染症専門の学校医、教職員から構成された組織です。彫刻学科の水上嘉久教授は、この「PNN委員会」の委員長という立場で、対応の初期段階から陣頭指揮に当たってきました。「いかに学生たちを学校に迎え入れることができるか。難しい試みでありチャレンジでした。当初はメディアから得られる情報しかなく、何が正解なのかも分からず手探り状態でした。そんな中、まずは学校医の先生に相談し、共に4日間にわたってキャンパス内の全工房やアトリエ、教室などを回り、換気能力をチェックして収容定員を決めていくことから始めました。その後、各工房の担当教員らと換気対策、多岐にわたる備品の除菌対策など、一つづ

つ確認していききました」この活動と並行しながら、各学科から専任のPNN委員を選出。Zoomによる会議に加え、チャットツールの「Slack」を活用し、全学科で情報を共有しながら感染対策に取り組んでいったという。「それぞれの教員が対策に関して、ものすごく真剣に考えて取り組んでくれています。自分の学科や部署で行っていることをSlackに載せて情報共有することで、他の学科でも試せるわけです。やってみないとわからないことが多いですから、とにかく実践してみる。各学科だけではなく、大学が一体となって情報を共有することは、今後の動きにもつながる、とても大切なことだと思います」その一方、感染予防に関して学生一人ひとりが意識を持つことも重要だという。

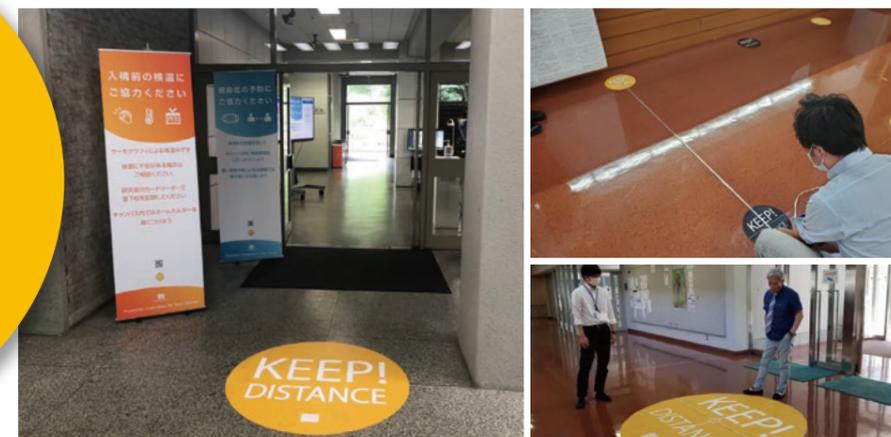
「安全な空間づくりは大学側が準備するだけではなく、学生たちにも自覚してもらえないと実現できません。それによって、この苦難を乗り越えていくのだという意識が、学生の中にも生まれてくると思うんです。今回のような世界的な事象からは誰一人逃れられない。全世界の人間が問題を共有し乗り越えようとしている。この経験は自分たちの創作活動に必ず影響してくると思いますね」



PNN委員長 水上 嘉久(彫刻学科教授)



### 『KEEP! DISTANCE』を呼びかけ、感染予防意識を高める活動



PNN委員会 湯澤 幸子(環境デザイン学科准教授)

#### 『KEEP! DISTANCE』のロゴをデザイン

感染リスクを避けるためとはいえ、学生たちがキャンパスに入った途端に、「これはしてはいけない」「何々はダメ」といった禁止用語が氾濫し、×印だらけになっていたら、気持ちまでふさがってしまうのではないかと、危惧しました。多摩美のキャンパスがナーバスな気分のみ込まれないように、×印ではなく、○印をアイコンに使うことで、美大ら

#### 湯澤先生からのメッセージ

しいウィットに富んだ雰囲気でも満たそうと思いました。注意喚起したいところにステッカーを貼る、缶バッジを身につけるなど、さりげなく新しい日常を意識づけしていくためのツールとして、活用いただければと願っています。多摩美に集う一人ひとりの小さな行動変容が、社会に大きなムーヴメントを起こす発端になるのだと信じています。

#### 感染症専門の学校医による巡視活動



#### 毎朝の入構をチェックする検温テント

#### チャットツール「Slack」を用いてオンラインで学科間の対策を情報共有



#### 食事・休憩場所への配慮



#### カードリーダーによる行動履歴のチェック



#### 学年別ネックストラップで入構できる人数を制限



#### 注意喚起ポスター



学生たちの不安に対し  
何ができるか

1

## 面接指導再開に向けた環境整備



### 素材研究室CMTELがフットペダル式 アルコール消毒マシンを開発



「最初は、『誰でも手作りでできる消毒スタンド』をコンセプトに、入手しやすい材料で作りましたが、耐久性や安定感を考えて素材を変更。多摩美のイメージを意識しながらデザインしました」(CMTEL職員 チャクスウェジ志保さん)。

ステンレスパイプやアルミ板などの素材を使う仕様に変更し、アルコールボトルを載せるプラスチックのボックスとキャップは3Dプリンターで製作。人件費を除けば、1台当たり2,800円の低コストを実現しました。現在、キャンパス内の各所に配置されています。

9月に開催された進学相談会でも実地試験を行いました。また、包括連携協定を結んでいる昭和大学からも「使いたい」という声をいただいているほか、近隣施設などへの寄付も考えています。量産化に向けて、より適切な素材の検討も行っています。

### プロダクトデザイン専攻

#### 外気を廊下、教室へと取り込む吸気システムを構築

デザイン棟1階南側廊下と北側廊下、デザイン棟2階南側廊下は数十メートルの長さがあり、廊下の端にある扉を常時開放していても空気が滞留してしまう問題がありました。そこで、各廊下の上部に天井吊り3台のサーキュレーターを設置。リリー形式で吸気を行

い、開放した扉や天井付近の窓から新鮮な空気を各教室内に取り込むことを実現しています。また、排気に関しては機械式換気装置や外窓を利用することで、エアロゾルによる感染を防止する取り組みを実施しています。



### 図書館の電子書籍貸出 & 宅配貸出 & 質問箱サービス

4月10日から電子書籍の貸出サービス「LibrariE」を開始。さらに5月からは、宅配貸出サービス「自宅に本を」を実施。貸出する際の送料は無料で運用しています。また、3,200人超のフォロワーを持つTwitterでは「質問箱」を設け、学生からの疑問や要望などに対応しています。



Twitter上の「質問箱」で学生と対話の様子

電子書籍の貸出サービス「LibrariE」

### 学内の画材店「びけん」の 宅配 & 質問箱サービス

八王子キャンパス内にある、学生におなじみの画材店「びけん」では、5月上旬から期間限定で画材の宅配サービスを実施。画材を入手しづらくなった学生向けに始まったサービスです。注文方法は、電話・FAX・メールの3種類から選択。基本、「びけん」の店員が車で配送するため、配達エリアは大学の近郊となりますが、住まいが遠方の学生には宅配便での配送にも対応。また、「びけん」のTwitter上に「質問箱」を設け、学生からの相談にも対応してくれています。

学生たちの不安に対し  
何ができるか

2

## 教員と卒業生からメッセージを発信

### 学部長メッセージ(6/19)



TOP > お知らせ > 学部長メッセージ

いよいよその時が来た。そう、教室やアトリエでモニターの画面を介してではなく、直接顔を合わせて語り合いたい。『私たちの多摩美』のあるべき姿を取り戻す第一歩が、ただ以前の様にすべてが元に戻るわけではない。いや、今私たちがすべきことは戻るとうとすることではなく、つねに更新される世界と対峙し、自らの強い意思を持って、まったく新しい日常をデザインしなければならぬのだ。

本学は4月以降、今回の感染症に対処すべく新たな委員会を立ち上げて取り組んできた。それは『オンライン対応委員会』『留学生対応委員会』『PNN (Promotion Committee for New Normal) 委員会』の3つの委員会である。それぞれは全研究室、全事務組織、そして学外の専門家からなるタスクフォースだ。もちろんかつてない事態への対応のため、給食当初は学生の皆さんに、不安や不満を招かせてしまったことは素直にお詫びしたいと思う。留学生の皆さんに対しては、オンライン授業の充実と相談対応などにより、出来る限り不安な気持ちを軽減するための努力を今後も続けていくつもりだ。そして未だ入国が判らないこの状況の好転を祈るばかりである(文部科学省への働きかけも続けていく)。

しかし、新たな視座が見えてきたのも事実である。手探りから始めたオンラインでの授業も、直接授業では得られない『遠いけれども近い』感覚は予想外の収穫であり、今後のさらなる可能性も感じられ、よりブラッシュアップされていこう。また学内だけでなく、国内外の関係機関との交流も活発化していき、アトリエや教室の実習とのハイブリッドな授業も考えられる。

### 理事長、学長メッセージ(4/11)



TOP > お知らせ > 2020年度 新入生の皆さまへ

新入生の皆さまへ、進学部長、教務部長、事務部長よりお祝いメッセージを掲載いたします。

進学部長 > | 教務部長 > | 事務部長 > |

#### 学長挨拶

多摩美術大学に入学された皆さん、大学院に入学された皆さん、おめでとうございます。本来なら皆さんの前で開校式に臨む言葉を述べなければならぬところですが、新型コロナウイルスの感染を防止するために開校式の入場を中止することができなくなりました。開校式の開催延期は皆さんの入学を遅らせてしまっていることをご承知ください。いかなる状況でも遅滞なく入学できるように努めます。それぞれに異なる希望を抱いて入学の日を待ち続けている皆さんの顔を思い浮かべながら、文章で学長としてのお祝いメッセージをお届けすることとします。

私たちの社会は静か、大きな変革にさらされています。アートの価値を再評価された皆さんも、その中で自分自身を表現し、社会を動かす役割を担ってほしいと思います。多摩美術大学は、皆さんが活躍の場として準備を整えています。皆さんの活躍が、多摩美術大学の歴史をさらに輝かせることとします。ぜひこの機会に挑戦してください。学長 田中 浩二

### 学部長メッセージ(4/11)



TOP > お知らせ > 在学生の皆さんへ

2020年4月11日に起きたこの出来事を知り、皆さんは驚かれたことだろう。成長した学生となった皆さんは、授業は予定通りであり、講義への参加も続けたいというよりリアルに感じているはずだ。距離感という見えない壁も、汚染された空気、汚染された水、無数の感染者、それら具体的な現実とデジタル空間の現実との違いを感じてほしい。皆さんの生活は、この現実とデジタル空間の現実との違いを感じてほしい。皆さんの生活は、この現実とデジタル空間の現実との違いを感じてほしい。

今回の新型コロナウイルスの感染は、私たちの生活に大きな影響を与えています。そしてそれは決して私たちに限ったことではありません。いや、残念ながらその影響は私たちの生活に波及してしまっています。海外の国境と交通を規制しているばかりでなく、今、世界中の人々の行動に大きな影響を与えています。

### 大学のホームページを通じて、それぞれの立場から 節目のメッセージを発信しました。

#### 各学科長メッセージ(5/1)



TOP > お知らせ > 2020年度 新入生の皆さまへ

新入生の皆さまへ、進学部長、教務部長、事務部長よりお祝いメッセージを掲載いたします。

進学部長 > | 教務部長 > | 事務部長 > |

#### 学長挨拶

多摩美術大学に入学された皆さん、大学院に入学された皆さん、おめでとうございます。本来なら皆さんの前で開校式に臨む言葉を述べなければならぬところですが、新型コロナウイルスの感染を防止するために開校式の入場を中止することができなくなりました。開校式の開催延期は皆さんの入学を遅らせてしまっていることをご承知ください。いかなる状況でも遅滞なく入学できるように努めます。それぞれに異なる希望を抱いて入学の日を待ち続けている皆さんの顔を思い浮かべながら、文章で学長としてのお祝いメッセージをお届けすることとします。

私たちの社会は静か、大きな変革にさらされています。アートの価値を再評価された皆さんも、その中で自分自身を表現し、社会を動かす役割を担ってほしいと思います。多摩美術大学は、皆さんが活躍の場として準備を整えています。皆さんの活躍が、多摩美術大学の歴史をさらに輝かせることとします。ぜひこの機会に挑戦してください。学長 田中 浩二

### 先輩から卒業生への メッセージ(3/23)



● 加藤 諒 (12年映像演劇卒業)

● AC部(安達 亨、板倉 俊介) (00年グラフィックデザイン卒業)

学生たちの学びを見守る教員たちの思いをホームページに掲載しました。『学生が孤独にならないように。アートやデザインを志す気持ちを捨てないように』。特に学部長の小泉俊己先生のメッセージは学内外から多くの反響がありました。これからの授業で、あるいは学生たちの中で、そのメッセージがどう生かされているかを見るのが楽しみです。

教務部長 和田 達也 教授(プロダクトデザイン専攻教授)

学生たちの不安に対し  
何ができるか

3

## 学びを継続させるために行った対策

### ▶ 経済面の不安に対して

- 学費が支払えるか心配
- オンライン授業に使うタブレットを買う余裕がない

#### ● 奨学金等の支援

- 緊急支援奨学金(全学生)  
大学院生を含む全学生を対象に、一律10万円を支給。返済義務なし。

- 学業継続特別支援授業料減免(対象学生)  
後期の授業料から30万円を減額。

#### ● 通信環境等の支援

- 年間通信費込みのタブレット端末を支給(新入生)  
新入生を対象にタブレット端末(LTE通信と年間の通信費込み/月額利用10GB)を支給。
- 通信環境への支援金として6万円支給(在学生)  
オンライン授業に対する通信費や端末の負担に対して、タブレット端末の支給または通信環境への支援金を支給。

本学では、毎年約2億円を拠出して奨学金や授業料の減免に充てていますが、今回の新型コロナウイルス感染拡大の対応として、学生の学びの継続を第一に考えて、通常の奨学金と授業料減免に加えた特別支援を実施しました。

学生課 大澤 正之 課長



### ▶ 精神面の不安に対して

- 自粛生活で友達にも会えない
- いつになったら大学に行けるのか

- 教員からのメッセージを発信(▶P.5)
- PNN委員会による「note」を用いた最新の情報発信
- 学生相談室での相談対応

学生や親御さんから問い合わせをたくさんいただく中、段階的ではありましたがキャンパスを開けると決めた以上、正しい情報を発信して学生や親御さんの不安を払拭したい思いから「note」による情報公開を行いました。誤解を受けることなく、大学の対応をきちんと紹介したい思いもありました。

教務課 石井 渉 課長

一人暮らしの学生も多く、メンタル面のケアは欠かせないと考え、学生相談室での電話やZoomによる相談を実施しました。また、障がいを持つ学生に対してはキャンパス・ソーシャルワーカーがきめ細やかに対応。さらに、24時間対応の「心と体の健康相談・ホットライン」の連絡先が書かれたカードを全学生に郵送で配布しました。

学生課 大澤 正之 課長

### ▶ 留学生の不安に対して

- 来日して授業を受けたいが、入国できない

- 留学生対応委員会を設置
- メッセージアプリを交流ツールに
- オンライン授業サポート
- 画材の海外送付

新入生を含め、新型コロナウイルスの影響で日本には入れない学生については、6月末までに休学の申請を行えば学費を徴収しないという対応をとりました。また、交換留学生の派遣・受入については、海外情勢を注視しながら、海外協定校と連携をとり、再開できる時期を検討しています。

国際交流センター 石田 一郎 課長



留学生対応委員会 佐竹 邦子 委員長(学長補佐)

「授業を受けたい。当初通りの年数で卒業したい」という気持ちは海外の留学生も同じです。その思いになんとか応えたくて、日本人学生と同様の支援を受けられるように取り組みました。入国できずにいる留学生にはメッセージアプリを用いて情報共有したり、必要な画材を送るなど、国際交流センターのスタッフを中心に各研究室担当者と連携し、懸命なサポートを行っています。

### ▶ 学修環境の不安に対して

- 学内の感染症対策は大丈夫か

- 構内清掃・消毒の徹底
- 『KEEP! DISTANCE』ステッカーを各所に掲示
- 「行動マニュアル」の作成

PNN委員会をはじめ各学科が一体となって、感染症対策に取り組んでいます。キャンパスに入る際の体温チェック(前期)、手指のアルコール消毒、『KEEP! DISTANCE』の呼びかけや換気の徹底など、独自に開発した器具(→P.4)なども用いながら可能な限りの対策をしています。

教務課 石井 渉 課長



### ▶ オンライン授業の不安に対して

- オンラインで、これまでと同じような授業を受けられるのか

- 「タブレットの使い方」アニメーションの制作
- G SuiteとZoomを中心としたオンライン授業環境とマニュアルを整備

全学生へのアンケート回答からオンライン授業の実施が現実的だと考え、タブレットの支給と通信費の支給を検討し、実施に至りました。また、入学はしたけれど大学に来ることのできない新入生に向けて、「先輩(在学生)からのWelcomeの気持ちを込めた」プレゼントが「タブレットの使い方」のオリジナルアニメーション制作という形になりました。

総合企画部 黒田 雄記 主任



制作:菅野 周、武井 智郎(プロダクトデザイン専攻4年)

オンライン対応委員会が発足する前から、オンライン授業になることを見込んで各学科の教授たちはリサーチや準備を進めていました。このような自発的な動きがあったことでオンライン授業をスムーズに進めることができたと思っています。

オンライン対応委員会  
安次富 隆 委員長(学長補佐)

- 学生の相談はメール、対面、オンラインで対応
- オンラインによる合同企業説明会の実施

### ▶ 就職活動の不安に対して

- 会社説明会が減って情報が見えない
- 希望の会社に就職できないのでは

現状、企業の採用意欲は世の中で言われているほど落ち込んではいません。また、今春の卒業生が内定を取り消された報告も一切ありません。それは、この状況においても元気な業界、企業に卒業生がたくさんいることに加え、業務と本学のカリキュラムがマッチしているため多くの企業から求められているからだと思えます。また、舞台美術関係やテレビ関係のエンターテインメント業界は厳しい状況にありますが、それは一時的なもの。むしろ、この世の中に絶対に存在しなければならないもの、多くの人に必要とされている業界だと思っています。

キャリアセンター 西田 修 課長



### ▶ 今後の不安に対して

- 授業は始まったけれど、これからの多摩美はどうなるのか元に戻るのか

#### これからも学生に寄り添い続けていく

元に戻るのではなく、新たな美術教育が始まると感じています。むしろ、オンラインだから可能になった授業の形もある。この困難な状況をポジティブに捉え、従来の授業ではできないこと、オンライン授業だからできることをメリットと考えて攻めの授業を目指したい。また、引き続き学生には精神面・物理面の支援を行わなければならないと思います。今後、オンライン対応委員会は「オンライン活用委員会」へと名称を変え、さらに良い授業へと発展できるよう力を尽くしていきます。まだまだ対応できていない部分もありますが、これからも学生に寄り添い続けていきます。

オンライン対応委員会 安次富 隆 委員長(学長補佐)



オンライン授業で見出した  
アート&デザインの可能性

1

## WEB上での展示から 新たな接点が生まれた

### バーチャル彫刻展

彫刻学科

2年生以上の有志が参加した『バーチャル彫刻展』。WEB上に作り上げた仮想空間を会場に、デジタル化された彫刻作品を展示する新たな試みです。彫刻の概念を覆すチャレンジングな企画が注目され、各メディアで話題となりました。

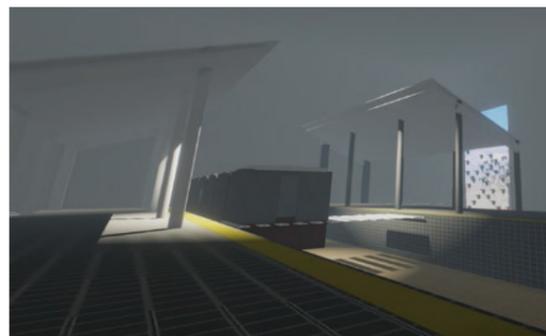
今回の展覧会は、大学に学生が入構できない状況の中、「彫刻学科として何ができるか」という思いから、高嶺格先生と木村剛士先生が中心となって企画したものです。監修と技術指導を情報デザイン学科メディア芸術コースの谷口暁彦先生が務め、アドバイザーに豊田市美術館学芸員の能勢陽子さんを迎えて実現しました。

「当初、こんなにスケール感のある展覧会になるイメージを持っていなかったのですが、今回はアイデアに合わせて空間を作っていました。通常と逆のプロセスは僕自身初めての体験。新鮮であり驚きでした。改めて『彫刻とは何か?』を考えるきっかけになったと思いますし、この展覧会の経験を経て彫刻学科として新しい試みが生まれるような期待感もありますね」



高嶺 格 教授

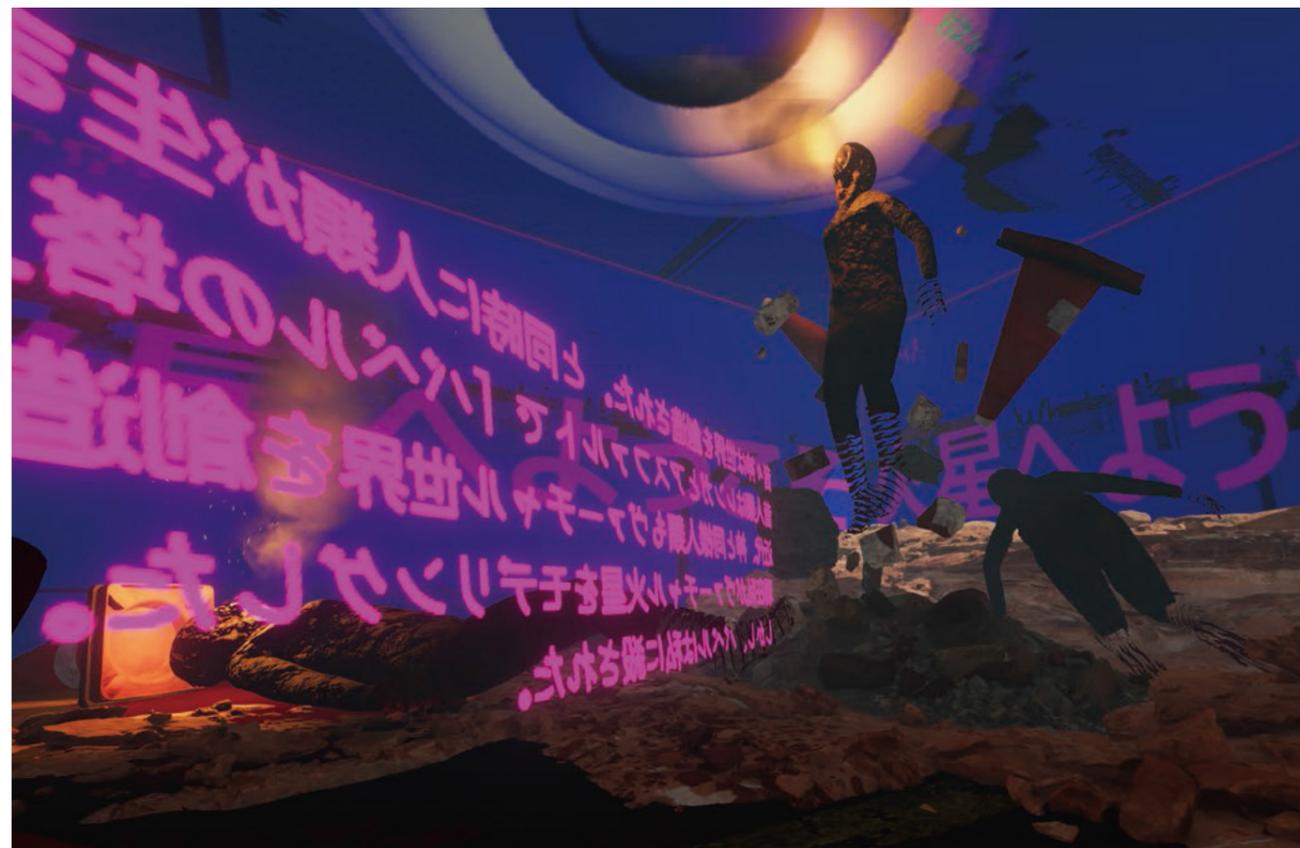
これまでの既成観念にとらわれない自由な発想で取り組んだ『バーチャル彫刻展』は、彫刻の新たな可能性を示すものとなりました。



『残っていく物』 池内聖司(3年)



『回る猫』 高塚千文(2年)

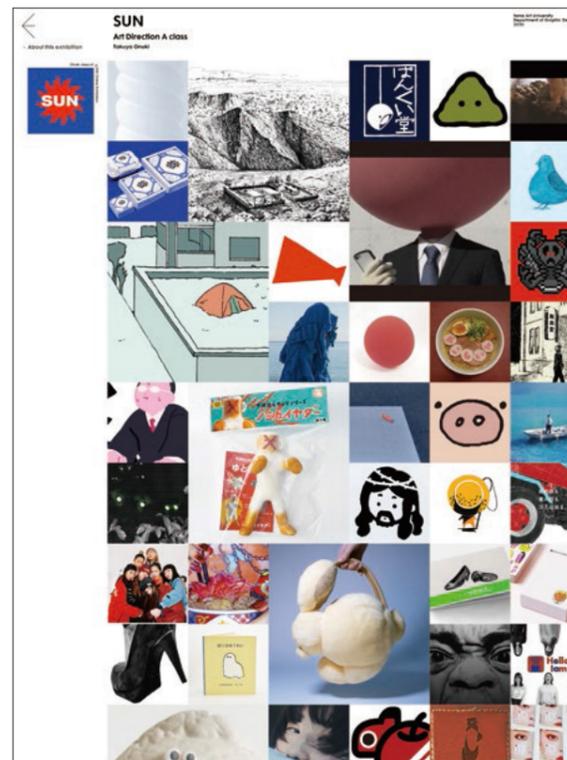


『火星のバベル』 チョウロウヨウ(大学院1年)

## Graphic Design Online Class Exhibition

グラフィックデザイン学科

4年生が前年度に取り組んだ課題制作を、WEB上で一堂に集めた展覧会。学内での閲覧ながら1万回を超えるアクセス数を記録しました。

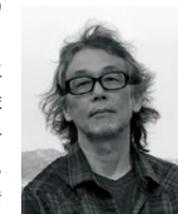


大貫卓也クラス/アートディレクションA / SUN / 学生作品一覧画面



「場所の制限がなくなり全クラス合同で開催することで、3年生の成果、力量をより多くの人に一度に見ていただける機会だと、むしろポジティブに捉えました。WEB上では作品の大きさや質感を体感できませんし、現物を見せられないことは残念ですが、学生たちのやる気やパワーを見ていただける機会になったのではないかと考えています」

またオンライン授業では、学生一人ひとりと向き合い、しっかりと話を聞ける機会が増えたそう。出席率も以前より高いとのこと。「この状況下だからこそ、これまでのやり方では見えなかったこと、分からなかったことの輪郭を捉えることができるようになりました。今回の展覧会では、WEBならではの作品のプレゼンテーションも意識しなければいけないことを気づかせてくれました。その意味でも今回で終わりではなく、今後も続けていくべきものだと思います」



大貫 卓也 教授

菅俊一プロジェクトによる課題成果展は、デザインという考え方の本質に改めて向き合い、「レイアウト」「翻訳」など12のテーマから制作課題を考案。お互いに解き合う試みをWEB上で情報共有できるツール「Scrapbox」で展開しました。

「この展覧会は、イノベーションを生み出す際によく言われる『問題発見・問題解決』の間に存在する『問題設計』というプロセスに重要性を見出し、問題設計を行うための基本的な考え方を学ぶことを目的として出題した課題の成果発表展示です。問題設計とは『より創造性のある解決方法を生み出すために、問題を作り変える技術』と定義しています。例えば新しい椅子を作る時にも、『自重を預けるための方法を考える』と問題を捉え直すことで、通常の椅子の概念を超えたアイデアを生み出すことが可能になるというものです。学生はデザインを構成する概念を学ぶための制作課題を考案し、その回答例と合わせて展示しています」

これらの成果物をWEBで展示したところ1週間という短い開催期間ながら、約4,000人のアクセスがあり、今後の展示方法の選択肢が広がったといいます。学外から課題にチャレンジした人も多く、オンラインならではの双方向の取り組みとなりました。また、「note」を使い、課題に取り組む学生たちの生のやりとりを5回にわたって掲載し、制作の過程を可視化しました。

「自分たちが、どういったふうデザインを学んできたのか、そこに対してどんな驚きや発見があったのかを、学生に率直に語ってもらいました。その内容が多くの人に魅力的に映れば、統合デザイン学科の意義を広く理解してもらえるのではないかと考えています」

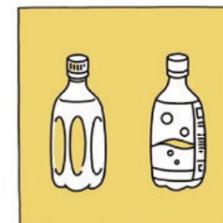


菅 俊一 講師

## 新しいデザインの教科書

統合デザイン学科

感覚の変換による観察



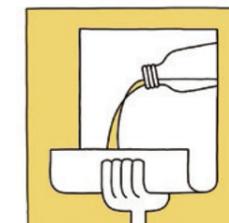
課題文  
ペットボトルを「触覚を頼りにした状態」と「視覚を頼りにした状態」でそれぞれ描きなさい。

作例: 「触覚を頼りに描画」 「視覚を頼りに描画」



課題説明文と作例画像・動画を合わせて表示し、誰でも実際に課題制作に挑戦できるようにWEB上で展示した

解釈が変わる写真



課題文  
片手で写真を持ち上げ、曲げながら見ることで写真の解釈が変わる写真表現を制作しなさい。

作例GIF①  
立っている人が屈んでいる人になる、動きの解釈が変わる



オンライン授業で見出した  
アート&デザインの可能性

2

## 制限された状況から強みを発揮

### ● 自作のマスクを装着して披露する1年生への課題『MY MASK』

#### ● プロダクトデザイン

1年生が前期の課題として取り組んだのは、「自分自身」をテーマに、このコロナ禍において日常的に使用するものではなく、自らのアイデンティティを込めたマスクを制作する『MY MASK』です。

装着して発表を行うため呼吸可能であることを条件に、素材・形状・装着方法は自由。課題説明から講評会まで全てオンラインでの開催となりましたが、制作途中の写真を基に、Google Classroomのチャット機能やZoomの音声会話を駆使することで、これまで同様、学生一人ひとりの進捗に合わせたチェックを行っていきました。Zoomを使用した講評会では、作品の意図に合わせた背景にするなどオンラインならではの工夫もみられ、賑やかな雰囲気の中でプレゼンテーションが行われました。

(担当教員:中田 希佳 教授・田中 秀樹 教授)



松本 モモ



小沼 まいこ



北山 陽菜



佐藤 由彩



中出 眞太郎

### ● 約70名の学生がリモートで履修 『ユーロ=アジア美術文明論』

#### ● 芸術

前期に行った授業の中で、学生からの反響が大きかったのが『ユーロ=アジア美術文明論』。学生に通信環境のアンケートをとったところ、全員がオンデマンドの動画を視聴できることが分かったため、Zoomを用いたオンライン授業に変更。約70名もの学生が履修し、授業内容も好評だった。

「今回の『ユーロ=アジア美術文明論』では、キリスト教美術について丁寧に教えることができたのですが、学生から『今まで嫌いだっけれど、とても面白いと思うようになった』といううれしい声や、『早く美術館に行きたい。ヨーロッパにも行ってみたい』などの意見も多数ありました。また、授業にGoogle Classroomを使ったことにより、一人ひとりの質問に丁寧に答えることができ、対面であれば1週間に一度しか答えるチャンスがないと思いましたが、何度もやりとりができました。」(金沢 百枝 教授)

### ● 沖縄、ベルリンと リモートでつないだ『特別講座』

#### ● 油画

コロナ禍対応として『特別講座』を2つ用意。1つは、多摩美術大学美術館で開催された『真喜志勉 展』について沖縄県立芸術大学の土屋誠一教授による沖縄からのリモート授業。もう1つは、ベルリン在住の非常勤講師・雨宮庸介先生による『技法講座/パフォーマンス』だ。

「雨宮先生と名誉教授である堀浩哉先生との『コロナ禍におけるパフォーマンスの可能性』についての先鋭的な対談が行われたりと、この状況だからこそ実現した授業は枚挙にいとまがありません。沖縄から、ドイツから、北海道から、そして中国から、それぞれの環境を生かし、確認するような豊かな表現が集まるようになったことはメリットだと感じています。」(石田 尚志 教授)

オンライン授業で見出した  
アート&デザインの可能性

3

## 各学科が行った工夫や対策

# ONLINE オンライン授業の工夫

### ● 日本画

#### ● 自宅で制作可能なドローイング

3年生の7月の課題として、自宅で取り組むことのできるドローイングの制作を行い、オンラインでの講評会を2週間に一度実施。初の試みだったが、自由な発想の作品がたくさん提出され、その後の制作においても、使える色幅が増えるなど、良い影響があった。

### ● 環境デザイン

#### ● 動画の特性を生かした授業に反響

『設計製図演習』は昨年度まで90名の学生が先生の周りを半円状に囲んで実演を見る形式で、細かい描写や詳細を全員が正確に見ることはできなかったが、今年度はZoomによるオンライン授業により、履修学生全員が先生の手元を見られるようになった。

また、『素材演習』ではゲスト講師の方に来校いただき、普段の授業と同じ工程を撮影することで、通常では見られないような細かい動作や詳細な部分の説明ができるようになった。

授業全体では、学生から「オンラインで提出しなければならないからこそ、3Dやいろいろなソフトに挑戦し、試すことができた」「資格を取るにあたり、授業を何回も見直すことができたので有意義だった」などの感想があった。



1年生の最初の課題『ドローイング』もオンラインで実施

面接指導とオンラインを併用した『デザイン課題』の講評の様子



面接指導とオンラインを併用した授業の様子

### ● 油画

#### ● 学生と教員との何気ない会話を育む授業

通常の授業とは別に『自由参加教室』を開講。授業前後の学生と教員の何気ない会話や廊下での立ち話のような時間にこそ、制作のヒントや表現に関する考えをお互いに伝え合う大切な瞬間がある。リモート授業ではどうしてもこうした時間が減ってしまうが、Zoomを使うことで、学生も教員も自由に参加し、積極的にいろいろな話をする事ができた。

### ● 彫刻

- 『メディア基礎演習』(二次元の編集技術を習得)
- ワークショップ『オンライン工房』(全学年向け)
- 全教員による『レクチャー 駅伝』(全学年向け)

実素材を使った授業を後期に回すなど、年間カリキュラムを全面的に再構成し、オンラインの授業を新たに立ち上げた。また、1年生向けには冒頭の3週間で2年生との合同授業とし、疎外感を持たせないための工夫をしたほか、実技系の課題では自宅に素材を送るなどの対応を行った。

### ● 工芸

#### ● 教員のデモンストレーション動画を配信

ネットワーク(吹きガラス)等の実習において、教員のデモンストレーションなどを動画で撮影してオンデマンドで配信。通常では見逃してしまいそうな細かい作業も確認しやすいよう撮影方法を工夫した。



卒業制作演劇公演に向けた企画立案会議の様子

### ● 演劇舞踊デザイン

- 講義にチャット機能を有効活用

講義中、ブレイクタイムに学生からの質問や疑問、感想をチャットで受け付け、随時回答。ラジオのパーソナリティとリスナーのような関係が生まれ、楽しい講義が実現できていると感じる。

授業レジュメを画面共有し、文章や図表を差しながら説明したオンデマンド授業が、「非常に分かりやすい」と好評だった。

### ● 芸術

- 教則ビデオの制作

『芸術基礎・ことば』でソフトの使い方を説明した回の授業の録画を配信したり、映像制作の授業において教則ビデオを制作し配信を行ったりするなどの工夫をした。

授業全体では「授業録画の配信によって自分のペースで学習できる」「何度も復習できる」「オンラインツールの知識が増える」「コメント機能を使って教員に質問しやすい」などの声が寄せられた。

後期のハイブリッド授業(オンラインと面接授業を同時に行う)風景については、『芸学ライブ』として学科オリジナルサイトにて配信していく予定。

### ● メディア芸術コース

- 演習系授業に必要な部品を学生に送付

電子部品を用いる『キネティックアート』や『サウンドアート』の演習系授業では、3Dプリンターで出力したパーツや電子部品を学生に送付して授業を行った。毎回の小課題は自宅撮影した映像で提出してもらったが、それ自体が一種の映像作品としても完成した。



オンラインによる「サウンドアート」の演習授業(右の画像も同じ)



## 今後の授業に生かせるメリット

### ● 日本画

- 講座の動画は未来への貴重な資産

オンライン授業の中で、技法や実習、講座を撮影して編集した動画は、今後入学してくる学生にも見せることができるので、研究室としては貴重な資産が蓄積されていっていると感じる。

### ● グラフィックデザイン

- 全ての学生が並列で情報を共有できる

学生の作品プロセスのアーカイブ、デジタルならではの学生との連絡、個々の学生の発表、教員の指導をクラス内全ての学生が並列で視聴できることは大きなメリット。また、ビデオを通じたコミュニケーションノウハウの蓄積は、国内外との交流に活用できる。

### ● 版画

- リモート授業で国際交流が活発に

リモートで授業を行うことで、海外の学生との意見交換ができるようになった。また、遠隔によるゲスト講師の講義、教員交換授業、遠方学生への通信教育、海外からの留学希望の学生へのテスト的な授業参加など、国際交流につながる可能性を感じる。

### ● 工芸

- クラウドで増した利便性と正確性

大学でしかできない制作と違い、クラウドを使用しているのでもに課題内容を学生同士が共有できるのが良かった。また、課題のフィードバックは文章でのやりとりだったため、口頭で伝えるよりも丁寧な説明ができた面もあった。

### ● メディア芸術コース

- 復習による習熟度の向上

これまでの授業では復習の難しかった部分、オンラインで見直せる動画や資料によってカバーされれば、習熟度の向上につながるのではないかと感じる。

### ● 統合デザイン

- 授業の流れが規則正しく

Google Classroomを使った毎回の授業内容の告知やフィードバックは、学生・教員共に、準備から実施、課題提示、課題提出、評価、といった規則正しい流れが自然と生まれ、授業の質が向上した。

### ● 情報デザインコース

- オンラインが持つ多様な可能性を実感

地方在住の受験生への進学相談や模擬授業、社会人や小・中学生へのレクチャーのほか、体調の悪い学生への授業対応にも活用できると実感した。



2年生の「知識と表現演習」講評中の様子

### ● テキスタイルデザイン

- 実物よりモニターのほうが見えやすい教材も

教員から「オンラインによって思いのほか授業が進んだ」という声があった。実物より画面(モニター)に置き換えたほうが見えやすくなる教材を持つ授業では、効果が出ていると思う。

# INFECTION 感染症対策

### ● 工芸

- 密を避ける授業用にマイク、スピーカーを導入

密を避けるために距離を保つことで、教員の声が聞き取りづらくならないようマイク、スピーカーを導入し、聞き取りやすさの向上を図っている。

3密を避けるために教室や工房に人数制限を設け、学年によっては2つのグループに分けて、別の場所で2つの課題を同時進行で行っている。

### ● 統合デザイン

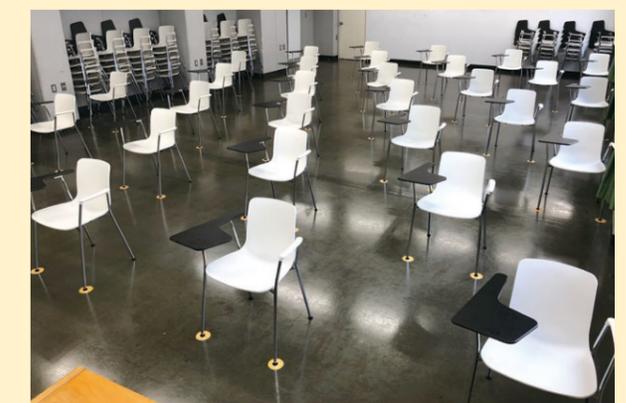
- メインの教室から複数の教室に授業内容を同時配信
- 授業後は机や椅子の除菌を実施

講義や課題説明については、メインの教室から他の2~8教室に対し、授業内容を同時配信。中間チェックや講評会は、時間割を作って少人数ずつ実施。また、各教室に除菌グッズを配置し、授業後は机や椅子の除菌を行う。

### ● 環境デザイン

- 教室の定員に合わせて履修学生をグループ分け

授業によっては、教室の定員に合わせて履修学生を2グループに分け、実施日・時間をずらして実施している。



教室内の床に「KEEP! DISTANCE」ステッカーを貼って椅子を配置

### ● プロダクトデザイン

- 窓に雨対策用のポリカーボネート板を設置
- 窓換気用の壁を設置
- 利用機器の物品貸出システム

雨の日でも教室の窓が開けられるように、窓にポリカーボネート製中空ボードを用いて雨除けのガードを設置。また、共通作業センター1階脇の屋外作業スペース(通称ピロティ)に隣接していることから換気がしにくかった2つの教室は、ピロティの粉塵を遮蔽する小さな壁面を2カ所に設け、教室それぞれの窓を1カ所ずつ、常時開けられるように改良した。第二作業センターでは、対面による物品の貸し出しをやめ、カードリーダーとICタグを導入することで、セルフで貸し出し物品の管理ができるようなシステムを構築した。



10~15cmほど窓を開けていても室内に雨が入らないポリカーボネート板

## リアルよりわかりやすい情報をオンラインで



### キャンパス紹介ムービー『らぶたまご』をYouTubeで公開

リアルイベントとしてのオープンキャンパスが中止となり、また入学後も新入生がなかなか入構できない状態が続いていた状況を鑑み、学内の施設を紹介する動画を作ろうと制作されたキャンパス紹介ムービー『らぶたまご』。学部長の小泉俊己教授(油画専攻)と、教務部長の和田達也教授(プロダクトデザイン専攻)がアートチームとデザインチームに分かれ、ナビゲーターとして八王子キャンパスと上野毛キャンパスを歩きながら、普段は見学することのできない各学科の工房や施設の数々を紹介しました。

制作は卒業生が全面協力

非常勤講師で映像ディレクターの古屋和臣先生(02年グラフィックデザイン卒業/04年大学院デザイン修了)を中心とした卒業生チームが制作しました。





# 日本画の卒業生 高山羽根子さんが 「首里の馬」で 第163回 芥川賞を受賞

第160回の『居た場所』、第161回の『カム・ギャザー・ラウンド・ピープル』に続き、3回目のノミネートで第163回芥川龍之介賞を受賞した卒業生の高山羽根子さん(01年日本画卒)に八王子キャンパスでお話を伺いました。

PROFILE

高山羽根子 たかやま はねこ

1975年富山県生まれ。  
2010年「うどん キツネつきの」で第1回創元SF短編賞佳作、  
2016年「太陽の側の島」で第2回林芙美子文学賞を受賞。  
2020年「首里の馬」で第163回芥川龍之介賞を受賞。  
著書に「オブジェクト」「居た場所」「カム・ギャザー・ラウンド・ピープル」「如何様」など。

## コロナ禍での受賞で 本役割を考えさせられた

— 芥川賞を受賞されていかがでしたか？  
高山 まわりの人たちが「ここ最近暗いニュースばかりだったから、受賞のニュースがすごく嬉しかった」と言っていたかまして。候補になったときの取材や受賞会もオンラインでゆったり人数を制限したりでみなさん手探りだったと思うんですが、この困難で折れるわけにはいかないぞという文学振興会さんや審査員の方たちの強い思いが伝わってきて、とてもありがたかったです。創作の中でも本は特に、生きる／死ぬの状況になったら置いてけぼりになる場合がけっこうあって、こんな状況で本を読んでも暇なんてないと思う人は多いと思うんです。でも、読者の方が「家にいるから読んでみました」と言ってくれて、家

にいたからといって、こんなに疲れる状況で物語を最初から最後まで読むって大変なことだと思うので、感想をくださったか、喜んでくださることがすごく嬉しく感じました。今って、場所に縛られてるじゃないですか。海外や県外に行くのも厳しいという状況の人たちがどこかに行くとなると、やっぱり物語の中という。私の作品には今いるところは別のところに希求するような話が多いので、本のできることを改めて考えさせられましたね。

## 観察する目を鍛えられた多摩美時代

— 美大を目指したきっかけを教えてください。  
高山 ずっと美術部だったわけではなかったのですが、1990年代後半、多摩美は辻(惟雄)学長で、村上隆さんなど日本画の新しいビジョンが立ち並んだ時期だったと思うんです。フィン

アートには進むつもりでしたが、予備校で学ぶうちに同じ絵を描くのであれば油より日本画かなあと。自分の内面を表現することよりも、周囲の驚異に目を向けたほうが楽しいという気持ちがあったんだろうと思います。定点カメラ的な描写を大事にしようとは思っていて、自分が立っているところや、まわりの世界をしっかりと丁寧に描写すれば、直接自分の輪郭を描かなくても浮かび上がってくるはずだという謎の信念みたいなものがあって(笑)。

日本画の中でも私は共通教育の授業を受けていたほうだと思います。港千尋先生や榎木野衣先生、萩原朔美先生の授業や、写真論や表現論、人類学などをわりと好んで受けていて。せっかく入学したんだからなるべく授業をいっぱい取って、4年間で吸収できるだけ吸収しようと思っていました。もし別の学科や、美大ではなく

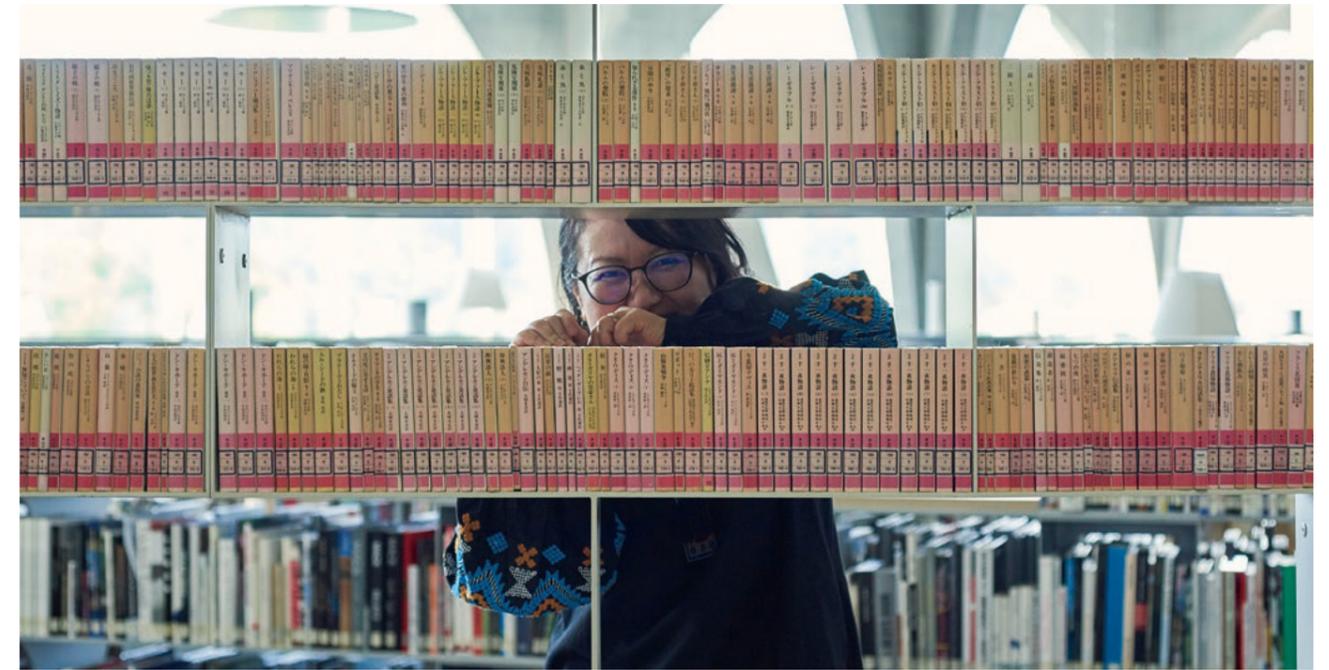
て普通に文学部に進んでいたら、今の自分にはなっていなかったらという気はします。表現方法が絵だろうと文章だろうと、観察する目を鍛えるという、描写をする手前の状態はまったく同じだと思うんです。その手前の部分に関しては、多摩美なり創作で培ってきたものかと思っていて、まったく無駄ではなかったのか、何ひとつ捨てたものはないんじゃないかと。卒業後は会社員になって、お芝居や美術展をたくさん観るなど自分を豊かにする方向にシフトしていったんですが、今思えば大学の共通教育の延長みたいなもので、それが全部取材になっていたんですかね。なので、多摩美の4年間で揺るがない自分の地盤を決めることができたのは、ラッキーだったなと思っています。

## ノイズの選び方に作家性が表れる

— そんな高山さんが小説の世界に飛び込んだきっかけはなんだったのでしょうか。  
高山 子どもの頃は少年少女文学全集を読んでいる程度で、大学の頃にポール・オースターやサリンジャーに源流があるようなアメリカ文学を読むようになったんですけど、小説家を目指すというほどのことはしていなかったんですね。ただ、30代半ばに9時5時の仕事に転職をして、早稲田大学の公開講座をいくつかとった中に創作文芸の講座があったんです。書き方を教わるというよりは、実作してみんなで読み合うという授業だったんですが、文章って最初から最後まで自分ひとり、しかもノートパソコン1台でできるのが楽し

かったんだと思います。そこで昔編集者をされていた先生に、『続けていけばまあ、なんとかならんじゃない』と褒められたのが、続けられたきっかけだったのかなと。多摩美にいるときからの癖みたいなもので、作品ができあがったらどこかに応募する、という発想が頭の中に染み付いていたので、最初にSFの短編賞に応募してみたら、佳作のようなものにひっかかってもらって活字になったんです。それが嬉しくて、なんとなく進んでいった感じですね。

— 受賞作『首里の馬』の舞台は沖縄で、主人公の未名子は遠く離れた地にいる回答者に向けてオンラインでクイズを出題するという仕事をするかたわら、町の資料館で土地の歴史を



アーカイブする作業を行っています。そしてある台風の夜、自宅の庭に一頭の宮古馬が迷い込んできたことから未名子の生活が大きく変化していくという物語ですが、一見関係のないような点と点がラストに向けてつながっていきますよね。その盛り上がり、謎解きのような快感にぞくぞくしました。  
高山 ありがとうございます。デビュー当時から、どちらかというと本読みが好きの本という評価をいただいでいて……それは褒め言葉だと勝手に思っているのですが(笑)。なので、今回は意外というんな方に読んでいただいて驚いているのですが、多摩美で表現活動をされている方にも何かしらの刺激になればいいな、と思いながら書いているところはありますね。

— 不思議な話で謎は残るのですが、現実起きてもおもしろくないようなリアルさがありますし、しっかりと心に刻まれる部分も多くて、そのバランスがとても心地良く感じました。

高山 今は現実自体がすごくノイジーで、情報がしつかり届いてしまうので、ノイズを全部なくすというのはどうしても現実から離れることになってしまうんですね。絵とか文章とか関係なく、そのノイズの選び方が表現者の腕の見せどころだと思うんです。たとえば『もの派』だったら、『ここにこれを置く必然』や『じゃあこれはどかさう』みたいなノイズのチョイスの仕方に、その作家さんの必然や切実さがにじみ出てくるんじゃないかと。

## — 今後書いてみたいテーマはありますか？

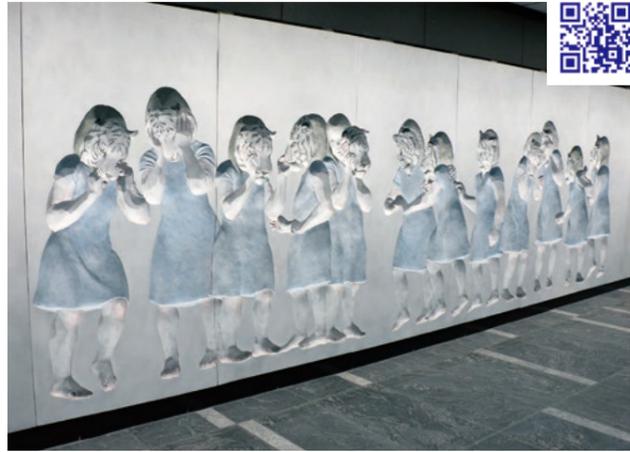
高山 オリピックをやる予定だった2020年に向けて、東京が今ものすごく変化しているんですね。街が変化すると書いておかないと前の景色を忘れてしまうので、2020年の東京の変化や、オリピックとコロナのこと、それに伴う人の動きや変わっていくランドスケープをまずは書き留めたいといけいないんじゃないかなという、切実なものも生まれています。



高山さんの取材当日は、建昌哲学長からお祝いの言葉と花束が贈られました。また、日本画専攻の武田左教授、千々岩修准教授、元非常勤講師の坂本藍子先生、メディア芸術コースの港千尋教授ら、高山さんが在学時からゆかりのある先生たちも駆けつけ、高山さんをお祝いするとともに、思い出話を花を咲かせる一幕もありました。

## 中谷ミチコ先生のレリーフ作品がSNSで話題に

8月1日、彫刻学科講師である中谷ミチコ先生の作品『白い虎が見ている』が、東京メトロ銀座線「虎ノ門」駅の渋谷方面行ホームに設置されました。本作品は、白い虎のマスクと戯れる少女たちの群像で、虎ノ門の地名の由来とされる四神の一つ「白虎」をモチーフとしています。中谷先生の特徴的な表現手法である凹型のレリーフにより、見る角度によって群像の表情が変化し、通り過ぎる人たちの視覚と意識を揺るがします。



中谷ミチコ『白い虎が見ている』 見る角度によって群像の表情が変化する様がよくわかる動画はTwitterに掲載した途端に話題となり、多くの反響があった。

## 大学院生対象の横断型講座「実験型ワークショップ創設」

2020年度後期より大学院生対象の横断型講座「実験型ワークショップ(EWS)」を創設しました。「実験型(実験的)」という単語を冠したこの講座は、学科や専攻の枠組みを超えて、学生が主体的に取り組む複合プログラムです。同時に「世界に貢献する美術とデザイン」を社会的使命に掲げる本学が、これまで取り組んできた研究教育をさらに発展させていくための新たな挑戦として、国際的かつ継続的に実施していく講座です。立ち上げに際して2名の特任教授を迎えました。カンヌ国際映画祭受賞のタイを代表する映画監督、アビチャッポン・ウィーラセタクン教授と、世界的アーティスト、塩田千春教授です。さらに学内外のゲスト講師も迎えながら、集中ワークショップ、レクチャーシリーズ、オープンゼミの3つの構成で実施していきます。今の時代だからこそ、これまで以上に大胆な創作の場の必要性を実感している学生に向けて、意義深い講座となることを目指します。



アビチャッポン・ウィーラセタクン  
Photo: Courtesy of Kick the Machine Films



Chiharu Shiota, Berlin, 2020  
Photo by Sunhi Mang

## トピックス

### 早稲田大学「EDGE-NEXT」に協働機関として参画・単位互換も開始

「EDGE-NEXT」は文部科学省が推進する次世代アントレプレナー育成事業です。2017年度より、早稲田大学を主幹校として採択された同事業にプロダクトデザイン専攻が協力し、起業家育成をテーマにアイデアやプロトタイプの効果的な表現力、機能面を含めたデザイン力を鍛える連携講座を展開してきましたが、今年度からは協働機関として参画。より先進的で高い総合力を有したプログラムの開発・提供を目指しています。また2020年度後期からは、早稲田大学との単位互換も行うなど、連携を深めています。

の影響により予定されていたPBL科目の実施が見送られましたが、連携協力協定に基づいた施策の検討を進めています。

### 新学生寮「多摩美オリーブ館」申し込み開始

2021年4月にオープンする八王子キャンパス隣接の大学直営女子学生寮「多摩美オリーブ館」の入寮申し込みが11月から始まります。詳しくは大学HPへ。



画像はイメージです。

### 昭和大学教職員と連携し「ヘルスケア・デザインチーム」を発足

3月4日、本学の八王子キャンパスに、昭和大学のさまざまな専門職の医療従事者7名を招き、「ヘルスケア・デザインチーム」の発足を図る1回目の会議を開催しました。これは、医療現場の課題をデザインで解決するための積極的な試みです。本学からは学長補佐の安次富隆教授、プロダクトデザイン専攻の大橋由三子教授が参加し、今後に向けた活動の方針などについて意見交換を行いました。

### 青柳理事長が石川県立美術館の新館長に就任

9月1日、青柳正規理事長が石川県立美術館の新館長に就任し、隣接地に移転した国立工芸館とともに「世界の工芸の中心の地にしたい」と意欲を語りました。

### テキスタイルデザイン専攻が「ゼミ展2020-見のがし卒展」に参加

9月8日～13日、六本木の東京ミッドタウン内にあるデザインハブで開催された「ゼミ展2020-見のがし卒展」にテキスタイルデザイン専攻から卒業生3名、修了生1名が参加しました。同展は例年、デザイン系の教育研究を行う大学からゼミ単位で参加展示を行う「ゼミ展」ですが、今年はコロナ禍により卒業制作展ができなかった大学が多く、本来卒業制作展で展示されるはずだった作品が集められ、学びの集大成を発表する貴重な機会となりました。



最終日の13日には高橋正教授と参加卒業生(竹内瑠奈さん、高島渚さん、横井菜穂さん、大村晋二郎さん)によるギャラリートークも行われました。

### アートテークにて「TAMABI Trial Exhibition ANYHOW」を開催

9月8日～26日に、八王子キャンパスアートテークで各研究室の助手・副手らによる展覧会が



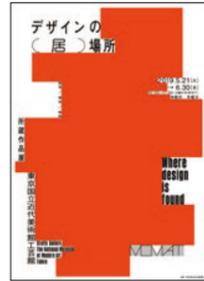
柴田あや乃「レモン水」

開催されました。「ANYHOW」には「とにかくやってみるしかない、元に戻るのではなく新しい何かを見つけ

## 受賞

### 「JAGDA 新人賞」を卒業生が受賞

10年グラフィックデザイン卒業・佐々木俊さんが「JAGDA 新人賞」を受賞しました。同賞は、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会(略称JAGDA)が発刊する年鑑『Graphic Design in Japan』出品者の中から、今後の活躍が期待される有望なグラフィックデザイナーに与えられるものです。佐々木さんはブックデザインをはじめ、さまざまなクライアントのデザインを手掛けていま



佐々木俊「美術館の所蔵作品展グラフィック「デザイン(居)場所」(c)東京国立近代美術館」

す。9月8日～10月15日には、受賞作品および近年のデザインと取り組みを展示する「JAGDA 新人賞展2020 佐々木俊・田中せり・西川友美」が、東京・銀座のクリエイションギャラリーG8で行われました。

### 卒業生のVRアニメーションがベネチア国際映画祭にノミネート

VRアーティストで10年グラフィックデザイン卒業・伊東ケイスケさんが監督を務めたVRアニメーション『Beat』が、第77回ベネチア国際映画祭バーチャルリアリティ(VR)部門「VENICE VR EXPANDED」のコンペティション作品としてノミネートされました。株式会社WOWOW、株式会社CinemaLeapとの共同製作によるもので、Haptics(触覚)という新しい技術を用いたデバイスを利用し、ユーザーの心臓の鼓動を作品に登場するロボットのハートと連動させ、心の葛藤や成長を体感しながら物語を楽しむことができる、今までにない新しい映像体験を提供しています。



伊東ケイスケ『Beat』

る展覧会に」という思いが込められています。コロナ禍における展覧会のあり方を探るため、11研究室、34名の助手・副手が出展しました。

### UI/UXデザインに関する産学共同研究をフルリモートで実施

4月から7月にかけて、情報デザインコース2年次の演習(担当:植村朋弘教授)で株式会社ロコガイドと連携し、UI/UXデザインに関する産学共同研究を行いました。2年目となる今回は、初の試

### 「東京ビジネスデザインアワード」で卒業生が最優秀賞を受賞

東京都が主催する「2019年度 東京ビジネスデザインアワード」において、ヤフー株式会社でプランナーとして活躍する14年情報デザイン卒業・清水覚さんとデザインを担当した07年プロダクトデザイン卒業・清水大輔さんの提案が最優秀賞に輝きました。同アワードは「都内のものづくり中小企業とクリエイターとの協働で新しいビジネスを生み出すこと」を目的に、企業が出すテーマに対して新規用途開発を軸に事業全体のデザイン提案を募るコンペティションです。清水覚さんは別の提案で優秀賞にも選ばれダブル受賞となりました。



清水覚、清水大輔「新規培養技術による「酒づくりイノベーション」

### 修了生の作品がアヌシー国際アニメーション映画祭にノミネート

グラフィックデザイン・金子勲矩副手(19年大学院グラフィックデザイン修了)の修了制作『The Balloon Catcher』が、アヌシー国際アニメーション映画祭2020の卒業制作部門に選出されました。今年のコンペティションには世界各国から3,070本の応募があり、各部門で計205本の作品が入選。学生による卒業制作部門には計44作品がノミネートされています。同部門の日本からの選出は金子副手の作品のみです。

### 卒業生の作品がカンヌ国際映画祭のXR部門に入選

19年メディア芸術卒業・油原和記さんの卒業制作『MOWB』が、カンヌ国際映画祭のXR部門「Cannes XR 2020」VEER FUTURE AWARDに入選しました。VEER FUTURE AWARDは、360°映像に特化したコンペティションです。油原さんの作品をはじめ選出された14の作品が、VR美術館を鑑賞できるソーシャル体験アプリ「Museum of Other Realities」などで公開されました。

みとして全ての授業および研究発表をフルリモートで実施。サービス企画からスマートフォンアプリのUIデザインに落とし込むまでの成果が、現在、ロコガイドのホームページで公開されています。

### 校友会から学生支援の寄付金を受領

6月7日、コロナ禍で経済的に困窮する学生への学業継続事業の資金として、校友会から5,000万円の寄付金を受領。授業料減免などの特別支援措置の実施に充てられました。

### 修了生がJIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展2020で最優秀賞を受賞

公益社団法人日本建築家協会(JIA)が主催する第18回 JIA 関東甲信越支部 大学院修士設計展2020で、19年大学院環境デザイン修了の王琳さんの「階段空間とその周囲の場の連続」が最優秀賞の栄誉に輝きました。今回は東京藝術大学や筑波大学、早稲田大学など24の大学院が参加し、44作品の応募の中から選ばれました。

### 統合デザインの学生がBOVA2020学生部門賞を受賞

BOVA(Brain Online Video Award)2020の一般公募部門で、統合デザイン4年・布瀬雄太さんが学生部門賞を受賞しました。BOVAは広告・クリエイティブ専門誌「ブレーション」が2013年から実施しているオンラインに特化した動画コンテストで、一般公募部門では協賛企業から出された課題に対して解決策となる3分以内の動画を募集。布瀬さんの『伊予銀行 大喜利「こんな銀行はいやだ!」』が受賞しました。



布瀬雄太「伊予銀行 大喜利「こんな銀行はいやだ!」

### グラフィックデザインの学生がCSデザイン賞で銅賞を受賞

第21回CSデザイン賞の学生部門で、グラフィックデザイン3年・脇田樹さんが銅賞を受賞しました。同賞は株式会社の中川ケミカルが主催する「カッティングシート®」のデザインアワードで、学生部門の課題は、設立35周年を迎える複合文化施設「スパイラル」のデザイン提案でした。受賞作品『窓(マド/windows)』は、35の開かれた窓と1つの閉じられた窓を配置し、計36の窓で構成されています。スパイラルの35周年を祝い、さらにはこの空間がこの先ますます開けていくようにとの願いが込められています。

# 人事異動

## 定年退職

2020年3月31日付で11名の方が定年退職されました。長い間お世話になりました。

### 野田裕示 教授 油画専攻

学生には、制作し発表することの大切さとともに、それを継続し展開させ変化させていくことの重要性を伝え、これらを自らも実践することを常に目標としてきました。どれだけ貢献できたかは疑問ですが、学生たちから刺激を受けつつ自身の制作を続けることができた17年間は私にとって大変充実した日々でした。今はいろいろなところで卒業生の作品や名前を見つけることが何よりの楽しみとなっています。



### 多和圭三 教授 彫刻学科

多摩美を退職して早くも半年が経とうとしている。57歳まで定職はなく、彫刻が売れるはずもなく、非常勤アルバイトのようなことで、何とか生きていた。そんな時、多摩美から就職の話が来た。定職を持った自分に違和感を感じながら11年間で過ぎ去った。いざ職がなくなってしまうと、11年間覆い隠されて見ようとしていなかったことが、否応なく見ざるを得なくなってしまったことに気付かされる。今が私自身本来の姿と思うが、戸惑っている自分を感じる。ある人から「これからだな、楽しみにしている」と言われた言葉に、励まされながらもプレッシャーに感じたりもしている、今日この頃です。金属工房で鉄と一緒に触った皆さま、研究室の皆さま、また、汚れた作業服で学内を彷徨っていた私を、何も言わないで放置しておいてくれた多摩美術大学の皆さま、ありがとうございました。



### 村井進吾 教授 彫刻学科

グラフィックデザイン学科の非常勤講師として19年間立体的造形を担当した後、2011年彫刻学科に着任しました。震災の混乱から始まり、コロナ禍で先の見えないままの退任となりました。大きな節目に在籍した感があります。この状況下でこそ多摩美の「意力」が発揮され困難を乗り越えていくことと思います。



### 野口裕史 教授 工芸学科

非常勤講師として28歳で着任してから42年間、当初実技授業の実施に向け学生たちと共に環境整備に明け暮れた頃を懐かしく思います。自身の制作を示しながら学生に指導する大変距離の近いものでした。現在では、充実した制作環境の中にあり思う存分に情熱をぶつけることができると思います。自身の感性を育み制作に励んでください。



### 山形季央 教授 グラフィックデザイン学科

36年間の勤務作家を経たのち、グラフィックデザインを学ぶ若者たちと向き合いました。自らの初心を思い出し、彼らは何を学ぶべきか、問いかける毎日。教えたのではなく教えられました。デザインの価値を次世代につなぐ研究を深めていく決意を得たのは、多摩美という優れた環境のおかげです。皆さまに深く感謝しております。



### 鶴岡真弓 教授 芸術学科

誠にお世話になりました。四季折々の自然の色彩に包まれた「鎌水の丘」のキャンパス。ゼミの学生さんたちと膝を交え毎回発表とディスカッションを積み上げさせていただけたことは大きな糧になりました。2020年度からは、微力ながら大学美術館館長として鋭意努めさせていただいております。今後とも何卒ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。



### 大場再生 教授 統合デザイン学科

1991年から2013年まではグラフィックデザイン学科の非常勤講師として、その後2014年から2020年までは統合デザイン学科の教授としてお世話になりました。本学卒業生の私にとって、多摩美ならではの豊かな才能を持った後輩たちや、いま第一線で活躍されている先生方と出会えたことは幸せでした。今後の多摩美術大学のますますの発展と卒業生の活躍を心から願っています。



### 佐々木正人 教授 統合デザイン学科

2014年「統合デザイン」の立ち上げから、客員、専任として5年間、在籍しました。多様なアプローチから、新ジャンルを目指している上野毛は、創設の空気に満ちていて、それに立ち会えたことは、たいへん幸運でした。卒業生が世界に何をやるのか楽しみです。



### 松本直樹 主幹 教務部研究支援課

少し早めの店じまいをさせていただきました。世界は大きなうねりの只中にありますが、多摩美丸がその波を乗りぎり、さらなる飛躍を遂げていくことを願っています。自分に使われる予定であった諸経費を学生の皆さんのために生かしていただけましたら、これほどうれしいことはありません。お世話になったあの人、あの方へ、感謝、合掌。



### 浅野真澄 主幹 附属図書館

定年退職致しました。私の長くもあり短くもあつた多摩美術大学での勤務。美術大学の図書館で働かせていただき、一般の図書館では出せない色鮮やかな本、装丁が変わった本、一人では持てないほどの重い本等に触れることができたのは、人生を豊かにしてくれる私の財産です。知識豊富な職員と素敵なスタッフに恵まれてとても充実した仕事ことができました。また図書館勤務の私は携わることが少なかったけれど、4月の入学式、7月の暑かったオープンキャンパス、11月銀杏の一面黄金色の中での芸術祭、1月末から2月の入試、3月の卒業式と、その時々のごことが次々と思ひ出されます。皆さまお元気で過ごしてください。



### 川村光二 副参事 教務部入試課 ※2020年4月より総合企画部に非常勤嘱託として在籍

## 退職

### ●美術学部

ヴァーリヘイ・ユディト (プロダクトデザイン教授)

山寄雷蔵 (日本画助手)

堀田千尋 (油画助手)

塚田優 (油画助手)

山本直 (工芸助手)

山田みのり (グラフィックデザイン助手)

伊藤圭吾 (グラフィックデザイン助手)

石黒芽生 (グラフィックデザイン助手)

榎原由実菜 (環境デザイン助手)

山田佑樹 (環境デザイン助手)

堀口淳史 (情報デザイン助手)

新井梨沙 (情報デザイン助手)

坂本千彰 (情報デザイン助手)

坂本睦月 (統合デザイン助手)

相澤なほ (統合デザイン助手)  
原淳之助 (統合デザイン助手)  
丸井智史 (演劇舞踊デザイン助手)  
山方里江 (演劇舞踊デザイン助手)  
梁玉恬 (共通教育助手)  
天沼雅史 (共通教育助手)  
(以上2020年3月31日付)

### ●教務部研究支援課

長井佑馬 書記 (2019年12月31日付)

### ●教務部教務1課

小澤澄人 書記 (2020年3月10日付)

### ●教務部教務2課

七島泰斗 主事補

### ●学生部学生課

新井千歳 常勤嘱託

### ●附属メディアセンター-工作センター

河口弘美 常勤嘱託

### ●生涯学習センター-事務部

渡邊智巳 常勤嘱託 (以上2020年3月31日付)

## 新規採用

### ●美術学部

高嶺格 教授  
彫刻学科



手銭吾郎 教授  
工芸学科



金沢百枝 教授  
芸術学科



高橋庸平 講師  
グラフィック  
デザイン学科



尾形達 講師  
プロダクト  
デザイン専攻



中嶋弘樹 (日本画助手)

馬場美桜子 (油画助手)

宮川遥弥 (油画助手)

大澤悠介 (工芸助手)

伊藤美沙子 (グラフィックデザイン助手)

金子勲矩 (グラフィックデザイン助手)

北村拓之 (グラフィックデザイン助手)

森本真生 (グラフィックデザイン助手)

増田麻由 (プロダクトデザイン助手)

力村真由 (環境デザイン助手)

近藤好 (環境デザイン助手)  
白石覚也 (情報デザイン助手)  
橋本ゆつき (情報デザイン助手)  
平山夏帆 (メディア芸術助手)  
吉田和央 (メディア芸術助手)  
白井英里香 (統合デザイン助手)  
坂本理恵 (統合デザイン助手)  
山口千晶 (統合デザイン助手)  
西端万柚子 (演劇舞踊デザイン助手)  
松田真季 (演劇舞踊デザイン助手)  
菅原洋政 (共通教育助手)  
木村かのう (共通教育助手)

### ●大学院

ムーニー・スザヌ (助教)  
(以上2020年4月1日付)

### ●教務部国際交流センター

牧祥子 常勤嘱託

### ●生涯学習センター-事務部

望月みく 常勤嘱託  
(以上2020年1月1日付)

### ●教務部研究支援課

末永康平 主事補  
(2020年2月1日付)



### ●学生部学生課

今井知子 常勤嘱託  
(2020年3月24日付)



### ●教務部入試課

金秀貞 書記



### ●教務部国際交流センター

吉田玉青 書記



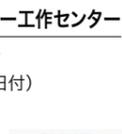
### ●生涯学習センター-事務部

菊地まこ 書記



### ●附属メディアセンター-工作センター

秋山敏和 常勤嘱託  
(以上2020年4月1日付)



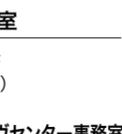
### ●総務部情報推進課

渡部和佳子 主事補  
(2020年5月1日付)



### ●附属美術館事務室

保坂洋平 常勤嘱託  
(2020年6月17日付)



### ●附属アートアーカイヴセンター-事務室

本田和葉 常勤嘱託  
(2020年6月22日付)

### ●総務部経理課

井部健太郎 課長補佐



### ●学生部キャリアセンター

木村紗知子 常勤嘱託  
(以上2020年8月1日付)

### ●教務部教務課

清永茉季 常勤嘱託

### ●附属アートアーカイヴセンター-事務室

山腰亮介 常勤嘱託  
(以上2020年9月1日付)

## 昇格

石田尚志 教授 (油画)

佐々木成明 教授 (メディア芸術)

土屋康範 教授 (演劇舞踊デザイン)

野間田佑也 准教授 (統合デザイン)  
(以上2020年4月1日付)

## 学部長

小泉俊己

## 学長補佐

安次富隆、佐竹邦子

## 学科長

岡村桂三郎 (日本画)

木嶋正吾 (油画)

古谷博子 (版画)

高嶺格 (彫刻)

小林光男 (工芸)

大貫卓也 (グラフィックデザイン)

武正秀治 (プロダクトデザイン)

高橋正 (テキスタイルデザイン)

松澤穰 (環境デザイン)

原田大三郎 (情報デザイン)

小川敦生 (芸術)

深澤直人 (統合デザイン)

金井勇一郎 (演劇舞踊デザイン)

諸川春樹 (共通教育)

## 附属図書館長

平出隆

## 附属美術館長

鶴岡真弓

## 附属アートアーカイヴセンター

久保田晃弘 (所長)

## 附属メディアセンター

永原康史 (所長)

## 附置芸術人類学研究所

鶴岡真弓 (所長)

港千尋 (所員)

安藤礼二 (所員)

金子遊 (所員)

平出隆 (所員)

## 生涯学習センター

海老塚耕一 (センター長)

久保田晃弘 (プロデューサー)

西岡文彦 (プロデューサー)

木下京子 (プロデューサー)

## 名誉教授

野口裕史、山形季央  
野田裕示、鶴岡真弓  
(以上2020年4月1日付)

## 客員教授

### ●美術学部

● 油画：光田由里、塩田純一

● 版画：清水穰、秋山伸、倉地久

● 彫刻：多和圭三、北澤憲昭、

青木野枝、福永治、須田悦弘

● 工芸：藤田政利、安藤藤、武田厚、

八田雅博、天野裕夫

● グラフィックデザイン：三浦武彦、

カリ・ビッポ、葛西薫、竹中直人、

佐藤可士和、菊竹雪、加藤久仁生、

津山克則

● プロダクトデザイン：ヴァーリヘイ・

ユディト、小倉ひろみ、山中俊治、

廣田尚子、アウグスト・グリッロ、

岩佐徹

● テキスタイルデザイン：皆川魔鬼子、

ジャック・レノー・ラーセン、関島寿子、

新垣幸子、皆川明、相澤陽介、

伊藤志信、ヘレナ・ハイヴァネン、

安東陽子、池田祐子、鈴木マサル

● 環境デザイン：伊東豊雄、藤江和子、

中村好文、団塚栄喜、廣村正彰、

青木淳、田根剛

● 情報デザイン：厩本純一、西山浩平、

小林章、上田壮一

● メディア芸術：四方幸子、伊藤俊治、

坂根徹夫

● 芸術：酒井忠康、菊地信義、高萩宏、

田窪恭治

● 統合デザイン：佐々木正人

● 演劇舞踊デザイン：謝珠栄

## ●大学院

横尾忠則、馬越陽子  
(以上2020年4月1日付)

## 理事

退任 野口裕史  
(2020年3月31日付)

就任 小泉俊己、川上典李子  
(以上2020年4月1日付)

就任 深澤直人  
(2020年6月1日付)

## 訃報

室越健美 名誉教授

2020年4月8日 72歳

1992年～講師(絵画科油画専攻)

1993年～同助教授

1998年～同教授

2017年～名誉教授

安齊重男 客員教授

2020年8月13日 81歳

2004年～客員教授(絵画学科油画専攻)

※室越健美先生と安齊重男先生への追悼文は次号に掲載します。

謹んでお悔やみ申し上げます。ご冥福をお祈り致します。

# 多摩美術大学美術館



多摩市落合1-33-1 | 10:00 ~ 17:00 | 火曜休館 | 一般=300円 / 20名以上の団体=200円  
(障がい者および付添者、学生以下は無料、卒業生も校友会カードの提示により無料)



10月10日[土]~12月6日[日]  
**須藤一郎と  
世界一小さい美術館ものがたり**  
一人のサラリーマンが美術館を開設し館長となった。須藤一郎(すどう・いちろう 1936-)が画家 菅創吉の作品と出会いアート蒐集に目覚めたのが40代後半。そこから須藤の言う「真剣勝負の衝動買い」が開始された。アートへの思いはやがて夫婦による「すどう美術館」開設(1990)に至り、若手作家支援や東北の復興支援等の芸術による社会活動へと展開してゆく。本展は一人のコレクターが妻と共に歩み、作品と作家そして多くの人々や社会と響き合ってきた姿の軌跡である。この困難の時代、珠玉の作品展示と共に人の心を動かし人をつなぐ芸術の力をお届けしたい。

# アキバタマビ21



タマビが運営する新しい創造の場 3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自ら手掛ける企画展を、年間約8回開催しています。  
千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 201・202 | 12:00~19:00(金・土は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料



9月26日[土]~11月8日[日]  
**第84回展「鮭」**  
「モニター」=「鑑賞するための装置」の作品で構成し、この状況での表現を過去、現在、この先へと接続する契機とする。  
出品作家=塙龍太、大野晶、小左誠一郎、三枝愛、村田啓、楊いくみ

# 11月13日[金]~12月27日[日] 第85回展「Rejoice! 豊かな喜びの証明」

生きることと絵を描くことにつながりから、無意識下のコミュニケーションである情緒(喜びと懐かしさ)について目を向ける。  
出品作家=上田智之、菅原彩美、畑山太志、塙康平

# アートテーク



八王子キャンパスの中心に位置する、知と創造の多面的複合施設 アートテーク(Art-Theque)は2015年、旧図書館跡地に建設された施設です。ギャラリー、自由デッサン室(石膏室)、大学院博士後期課程アトリエ、アートアーカイブセンター、収蔵庫などで構成されています。  
八王子キャンパス内 | ギャラリー開館時間10:00~17:00(展覧会による) | 日曜・祝日休館 | 入館無料

# 第3回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム 「メディウムとしてのアートアーカイヴ」

12月5日[土]10:00~17:00 **オンライン開催：無料・事前登録制**

3回目となる多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウムを開催します。今回は「メディウムとしてのアートアーカイヴ」と題し、本学での取り組みの成果報告をはじめとして、遠隔授業やデータベース構築におけるアートアーカイヴについて発表・議論します。

## 事前登録・詳細はこちらから

お問い合わせ:多摩美術大学アートアーカイヴセンター事務局 aac@tamabi.ac.jp  
主催:多摩美術大学アートアーカイヴセンター  
協力:多摩美術大学メディアネットワーク推進委員会

ギャラリーで開催予定の展覧会「TAMA VIVANT II 2020」展、「平出隆最終講義=展 Air Language program」、「プロト・エイリアンプロジェクト」展の詳細はHPでご確認ください。



# 展覧会

李禹煥 名誉教授  
**STARS展:現代美術のスターたち—日本から世界へ**  
7月31日[金]~2021年1月3日[日] 森美術館

吹田文明 名誉教授、小作青史 名誉教授、相笠昌義 名誉教授、  
李禹煥 名誉教授、小林敬生 名誉教授、故・深澤幸雄先生、  
版画 | 古谷博子 教授、共通教育 | 丸山浩司 教授、他  
**ミュージアム コレクションII その1**  
**吹田文明と版画集『東京百景』**  
8月29日[土]~12月6日[日] 世田谷美術館

彫刻 | 木村剛士 講師  
**六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2020**  
9月12日[土]~11月23日[月・祝] 六甲山上施設(六甲ケーブル駅、他)

大学院 | 横尾忠則 客員教授  
**横尾忠則の緊急事態宣言**  
9月19日[土]~12月20日[日] 横尾忠則現代美術館

芸術 | 海老塚耕一 教授  
**海老塚耕一展 水と風の現象学—実体変化として—**  
10月10日[土]~12月20日[日] 東京アートミュージアム

彫刻 | 多和圭三 客員教授、工芸 | 尹熙倉 教授  
**ところざわ アートの潮流**  
11月15日[日]~12月6日[日] 所沢市民文化センター ミューズ

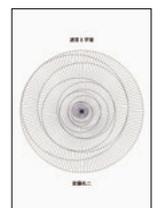
# 新刊



**メルロ＝ポンティの美学  
芸術と同時性**  
川瀬智之 著(芸術 | 非常勤講師)  
青弓社 | 2019年10月29日刊 | 3,800円+税



**佐藤可士和の打ち合わせ**  
佐藤可士和 著  
(グラフィックデザイン | 客員教授)  
日本経済新聞出版 | 2019年11月6日刊 | 1800円+税



**迷宮と宇宙**  
安藤礼二 著(芸術 | 教授)  
羽鳥書店 | 2019年11月17日刊 | 2,800円+税



**未来と芸術  
Future and the Arts**  
森美術館 監修 久保田晃弘 他著  
(メディア芸術 | 教授)  
美術出版社 | 11月17日刊 | 3,200円+税



**スポーツ／アート**  
中尾拓哉 編、他著(芸術 | 非常勤講師)  
森活社 | 2月6日刊 | 3,200円+税



**ふつう**  
深澤直人 著(統合デザイン | 教授)  
D&DEPARTMENT PROJECT  
| 17月10日刊 | 2,300円+税



**芸術人類学講義**  
鶴岡真弓 編、著(名誉教授)  
平出隆 著(芸術 | 教授)  
安藤礼二 著(芸術 | 教授)  
榎木野衣 著(共通教育 | 教授)  
筑摩書房 | 13月5日刊 | 1,860円+税



**ワールドシネマ入門  
世界の映画監督14人が語る  
創作の秘密とテーマの探求**  
金子遼 著(芸術 | 准教授)  
コトニ社 | 14月1日刊 | 2,100円+税



**人生は凸凹だからおもしろい  
逆境を乗り越えるための  
「禅」の作法**  
折野俊明 著(環境デザイン | 教授)  
光文社 | 19月17日刊 | 900円+税

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。総合企画部(TEL:03-3702-1168 / e-mail:news@tamabi.ac.jp)までお知らせください。

